

第13回全国棚田（千枚田）サミット開催状況

平成19年8月24日（金）、25日（土）の2日間にわたり、第13回全国棚田（千枚田）サミットが、栃木県茂木町で開催されました。大会当日は立っているのもツライような猛暑でしたが、そんな暑い中にもかかわらず、北は宮城県から南は鹿児島県まで、全国31都道府県から、2日間延べ1300名余の方々が集まりました。

今年は、「美しい土の里から～棚田から明日への提言～」をテーマに、棚田の明日を担う“子どもたち”にスポットを当て、サミットの主役として頑張ってもらいました。



1日目は、午前8時30分から、この大会の主催である全国棚田（千枚田）連絡協議会理事会、総会・首長等会議が開催されました。

午後1時からは開会式が行われ、第13回全国棚田（千枚田）サミットの開催が宣言されました。開会式に先立つオープニングセレモニーでは、

茂木町立中川小学校の児童と、昨年開催された日南市立酒谷小学校の児童、合計160人による「棚田に行こう」（サミット公式テーマソング）の大合唱があり、迫力満点の歓迎に参加者も大興奮し、一気に会場が盛り上がりました。



開会式後、基調講演（栃木県知事 福田富一）、県内の事例発表（宇都宮白楊高校生による棚田保全の取り組み、茂木町のむら

づくりと棚田オーナー制度、那須烏山市国見地区の棚田保全活動）が行われました。ひと際注目を集めたのは宇都宮白楊高校生の発表で、皆熱心に聞き入っていました。また、基調講演と県内の事例発表との間のコーヒードリンクでは、栃木県中山間地域活性化推進協議会加盟市町のPRや、特産品の試飲、試食が行われ、栃木県の取り組みも全国に向けて発信しました。



その後、広域的な鳥獣被害対策の必要性を、ユーモラスな寸劇を交えながら提言しました。

午後4時45分からは、屋外特設ステージにて、愛泉太鼓、河井ささら、飯野歌舞伎の3団体が郷土芸能を披露し、参加者を楽しませてくれました。



午後6時から全体交流会を開催し、オープニングではホンダのASIMOが登場して参加者を歓迎してくれました。また、ホテルのシェフによる地元食材を使った料理、むらづくり団体による手打ちそば、天ぷら、アユの塩焼きなど、茂木町の地産地消料理を味わっていただきました。





2日目の現地見学会では、早朝から大型バス16台に分乗して、入郷石畑と国見の棚田、ゆずの里、美土里館を見学しました。この日は中川中学校の生徒たちが大活躍し、現地までのバスの中では写真を見せながら見学地を説明したり、窓の外に広がる茂木町の里山を紹介したりと、大人顔負けの案内役を務めてくれました。さらに入郷石畑の棚田では、この日のために一生懸命育てた野菜を参加者に振舞ってくれました。

入郷石畑の棚田、ゆずの里では大きな歓迎看板を作ったり、国見の棚田では和太鼓の演奏をしたりと、それぞれの地域の特色を活かしたおもてなしで、参加者も大満足の様子でした。

現地見学後、閉会式会場である「道の駅もてぎ」に続々とバスが到着し、閉会行事が始まりました。この閉会式も中川

小学校、酒谷小学校の児童による「棚田へ行こう」の合唱が盛り上げてくれました。



共同宣言では、地元後継者を代表して、入郷棚田保全協議会の塩澤康治さんが、棚田を次世代へ継承していくことを宣言しました。その思いは、次回開催地である長崎県雲仙市・長崎市へと引き継がれ、2日間のサミットを終了しました。



提 言 書

1 税源偏重や税収格差を是正するための抜本的税制の改正

A 地方法人 2 税（法人事業税、法人住民税）の見直し

B 環境税の創設とその中山間地への重点配分

2 棚田の多面的、公益的機能の持続について

A 中山間直接支払い制度の普及・定着の促進と、将来的な継続

B 中山間地や棚田の保全に対する企業の社会的責任・貢献の明示

3 野生鳥獣害対策について

A 景観に配慮した里山の整備と、里山保全のための官民一体となった体制の構築

B 県境を越えた広域連携事業の積極的な導入

C 野生鳥獣の個体調整を図るために、自衛隊の活用を可能とする
法解釈、あるいは、法の改正

以上、要望提言いたします。

※この提言書は、平成20年2月6日（水）に農林水産省（大臣・副大臣・政務官・地域整備課）と棚田振興議員連盟（会長 保利耕輔 氏）に提出しました。